まちのみかた

Nakamura

まちは、いくつもの段階を経て誕生します。大きく分けると、①地形をみて、まちをつくる場所を決める、②道や水路などをつくり、まちの区画をつくる、③まちの中心に何を置くかを決めて、住むところや商いをするところなどを配置する、④それぞれの建物を建てる、の4段階で、どれも当時の歴史が大きくかかわってきます。この4つの視点で、中村の歴史を学びながら、まちの成り立ちを訪ねてみましょう。

建物
土地利用や地割にそって建物を建てる

土地の使い方
中心を決めて、住むところなどを配置する

町割り（まちわり）
道や水路などをつくり、区画をつくる

地形
地形をみて、まちをつくる場所を決める

まちはこうやってできるんだ！

［発行］四万十市まちづくり課
〒787-8501 高知県四万十市中村大橋通4丁目10 TEL 0880-34-8150 FAX 0880-34-0381

［制作］高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科 北山研究室
〒783-8508 高知県南国市物部乙200-1 TEL 088-864-5583

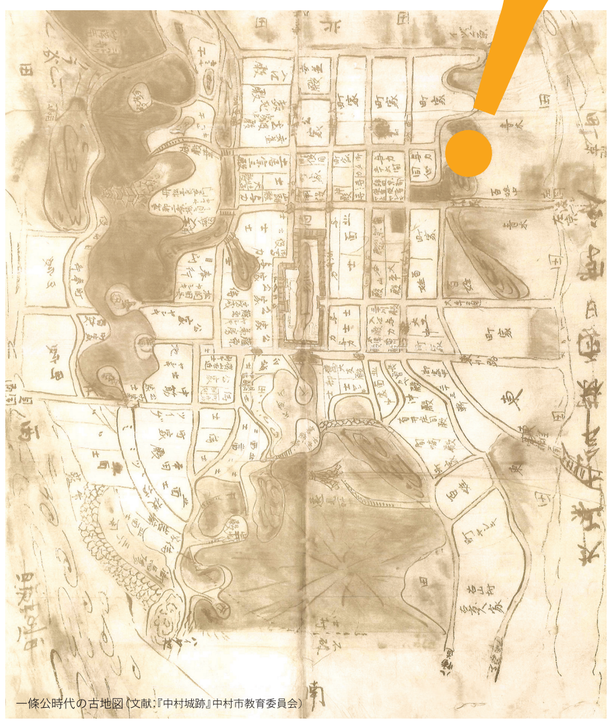
このマップは、四万十市まちなか再生検討会（2017年度～2018年度）の一環として実施した「四万十市まちなか地域資源調査」の成果をまとめたものです。

三万石時代の古地図（文献：『中村城跡』中村市教育委員会）

四万十市中村 Nakamura machinaka

まちなか散歩 発見

まちの成り立ちをみてあるき!!



一條公時代の古地図（文献：『中村城跡』中村市教育委員会）

中村のまちの成り立ち

Nakamura

中村のまちは四万十川と後川に挟まれた場所にあり、漁や運輸など川を利用した暮らしが続いてきました。中世になると1468（応仁2）年、京都から一條教房（のりふさ）が下向（げこう）してまちづくりの基礎を作り、江戸時代に入ると1601（慶長（けいちょう）6）年からは山内家の城下町として、その後も商業の町として発展してきました。毎年引き起こされる水害や、火事、地震など多くの災害により大きな被害を受けながらもその都度再生し、道路や町並みの整備を行い、現在は多くの町名が新しい名前に変化しました。今もまちの姿は変わり続けていますが、気をつけてまちを歩くと長く引き継がれてきた歴史を発見することができます。

大橋通から赤鉄橋をみる（文献：中村町復興アルバム 中村町役場）

地形

Nakamura machinaka

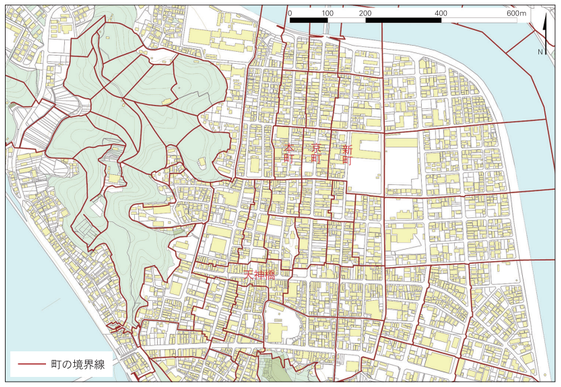
1 まちは土地の上につくられます。だから、まちづくりは、土地の形状や周りの環境などを知ることから始まります。

中村のまちは、四万十川と後川に挟まれた中州地帯に位置し、周辺を山に囲まれており、温暖多雨な気候も特徴です。

このような地形の特徴は、中村に下向（げこう）した一條教房（のりふさ）の暮らした京都に似ていますね。

街区と町割り

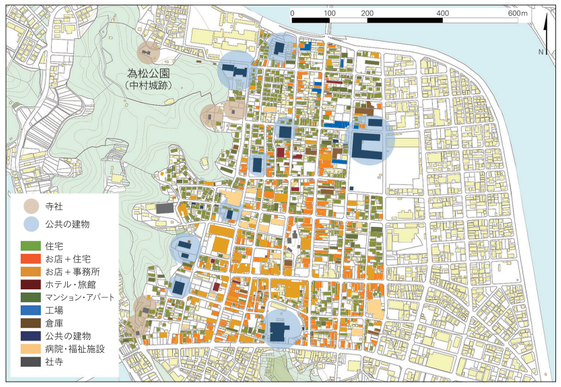
Nakamura machinaka



2 街区とは、町を形成する区画のこと。道、川、水路などを境界にして周りを仕切り、一つの区画を作ります。中村のまちは、南北の通りを「たてまち」、東西の通りを「よこまち」と呼び、道路が軸となって町が形作られています。また、右の写真を見ると、地区の東半分は第二次大戦後の頃は田畑が広がっており、西側が古くから町としてにぎわっていたことがわかります。

土地の使い方

Nakamura machinaka

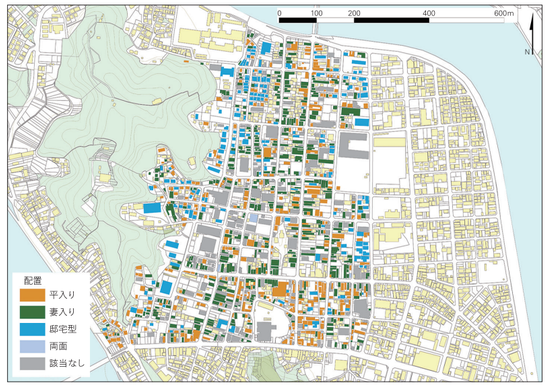


3 中村のまちでは、お城のふもとに寺や神社があり、平地には住宅や商店などが集まっているなど、住む人や商売、仕事によって住む場所や働く場所が選ばれています。

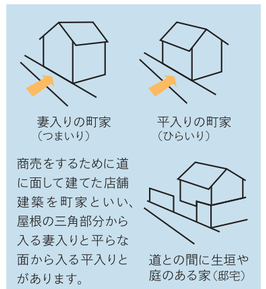
江戸時代には右の図のようにお城を中心として社寺や武家屋敷が並び、その周囲を町人の住まいが囲むという城下町が生まれ、今でもその土地の使い方が引き継がれています。

建物

Nakamura machinaka



4 中村のまちには、道に面した町家、道路との間に庭のある家、工場などたくさんの種類の建物があります。中世から江戸時代に形づくられた土地の使い方を引き継ぎ、現在の商店街には町家が多く、山裾には庭のある家が多く建っています。本町や京町には正面側の幅が狭い妻入りの町家が多く、天神橋には町家の正面だけを新しくした看板建築が軒を並べています。



四万十市中村 まちなか散歩 Nakamura machinaka

まちの成り立ちをみてあるき!! 発見

まちのいろいろな建物

中村のまちには、地形や町割り、使い方などに合わせた様々な建物を見ることができます。まちを歩きながら探検しよう!

【町家建築】

京町、天神橋、一条通りなどでは、道ゆく人々に対して商売を行うため、道に面して建てる町家が多く見られます。平入り、妻入り、両方の形が採用されてきたようです。

妻入り・平入り・看板建築が混在する昭和20年代の西下町

＜旅館＞

旅館の建物には、2階から庭や通りを眺められるよう欄干(らんかん)が付いたものが見られます。東下町に建つ築80年以上の笹岡旅館では、四万十川の石を敷いた土間が旅人を迎えます。

笹岡旅館

笹岡旅館の玄関

＜看板建築＞

建物の道がわ全体を看板のようにおおった建物のことを看板建築と言います。

タイルや金属板など、様々な材料を使ってお店のPRをしています。

マルサ醤油

＜角地の建物＞

中村では昭和20年代に、道路や住宅地を整備して暮らしやすく改善した際、建物の角を三角に削り、車が道を通りやすくしたため、角地に入り口を持つお店が多くできました。

福永酒店

【産業建築】

四万十川・後川の水や伏流水を使って、お酒、醤油を作ったり、川の水を使って染物をするなど、川を生かした産業が盛んに行われました。お酒などの醸造業を営む工場には、細い材料で大きな建物を作る「トラス構造」が用いられています。

マルバン醤油

【邸宅建築】

為松公園のふもとには、建物と道との間に庭のあるお家が多く見られます。江戸時代に武士や貴族がお城のふもとに屋敷を建てられ、現在でも広い敷地が引き継がれています。

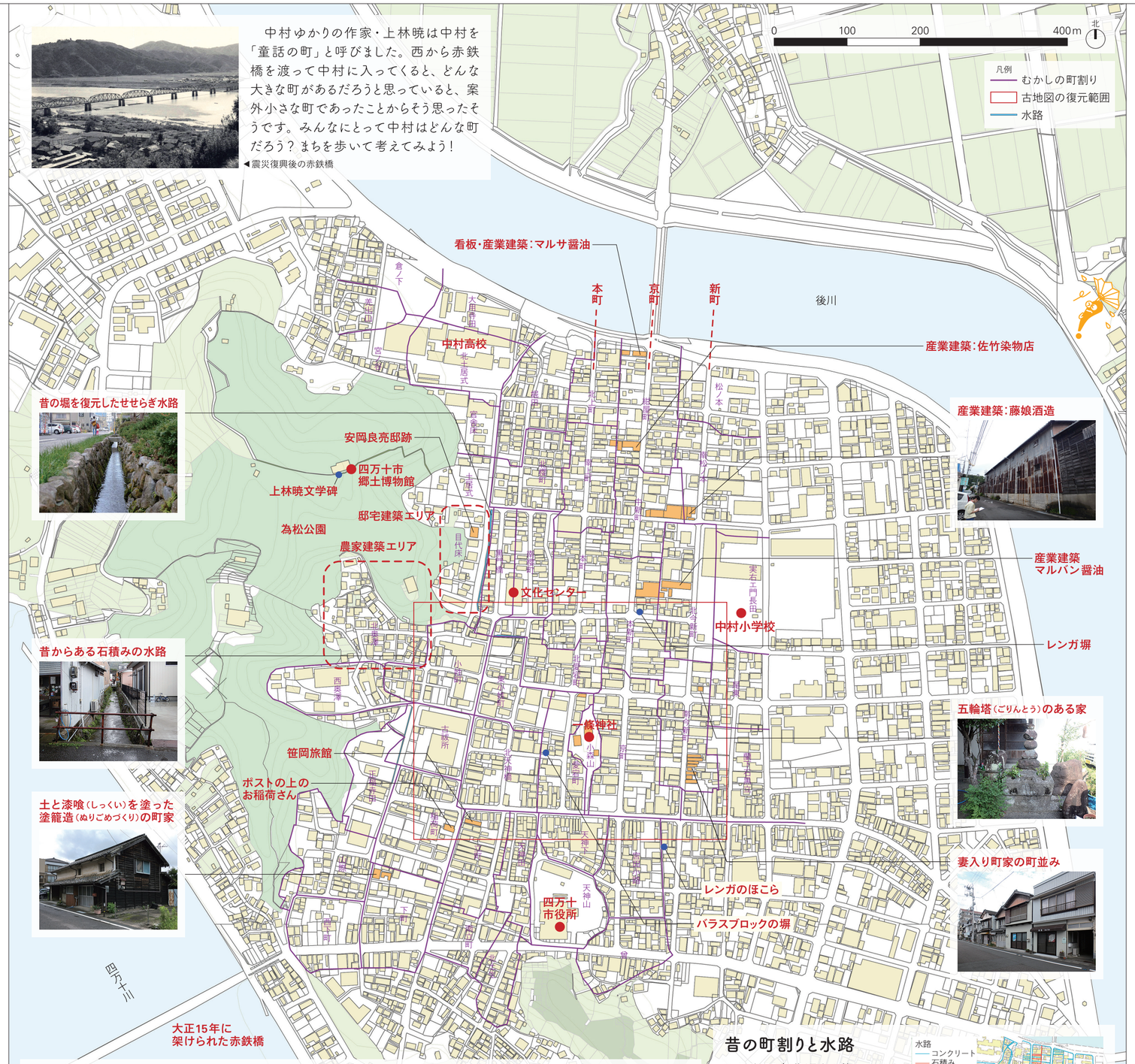
安岡良亮邸跡

【農家建築】

小姓町には、山の谷筋を利用して農業を営む農家の建物が見られます。広い敷地の中央に家を建て、周りに倉庫などを配置しています。

中村ゆかりの作家・上林暁は中村を「童話の町」と呼びました。西から赤鉄橋を渡って中村に入ってくると、どんな大きな町があるだろうと思っていると、案外小さな町であったことからそう思ったそうです。みんなにとって中村はどんな町だろう? まちを歩いて考えてみよう!

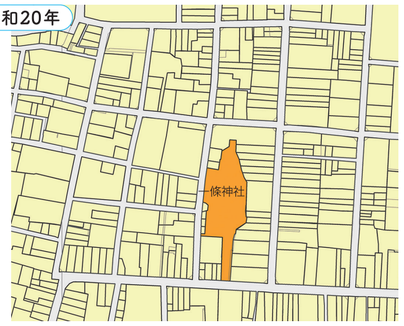
◀震災復興後の赤鉄橋



まちの様子をたどってみよう

今の中村の地図に、古地図に描かれた町の様子を復元してみました。土地の使い方が時代によって変化している様子がわかります。昔の道を歩いてみましょう!

昭和20年



時代によって

明治期に比べると、再び敷地がまとまってきます。神社の南東側には短冊形、西側には大きな四角い敷地が見られます。

明治45年

いろいろと

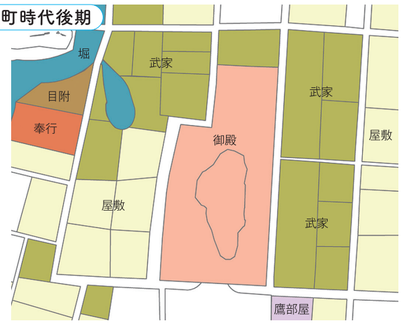
文久2(1862)年に一條神社が建てられます。武家屋敷の解体にともない屋敷地が小さく分けられ、ところどころに畑が見られます。

江戸時代初期

土地の使い方が

一條公の屋敷はご廟所(ごびょうしょ)となり、東側には短冊状(たんざくじょう)の町家が並び、西側には四角い敷地の邸宅が並んでいます。

室町時代後期



わかるネ!

今の一條神社の周辺には一條公の御殿(ごてん)がありました。それを守るように武士の家が周りを囲み、その周りに屋敷や町家が建っています。

まちの歴史を教えてくれるいろいろな素材

中村は木材の産地に近いことから、幅の細い木の板を外壁に使った建物が多く見られます。

横板

タイル

刻印(こくいん)のあるレンガ、安並で焼かれた瓦、砂利を入れたコンクリートブロックなど面白い素材がたくさん! まちを歩いて探してみよう!

バラスブロック

下見(したみ)板

縦板

レンガ

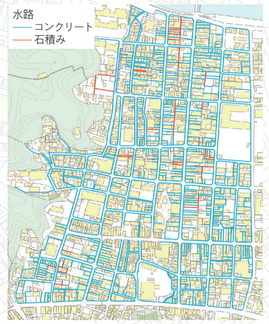
瓦

瓦

昔の町割りと水路

昭和30年代頃まで使われていた町名を上の地図に示しました。染物屋さんのある紺屋町、お稲荷さんのある稲荷町など土地の使い方に対応して町の名前が付いていることがわかります。

また、右の図でまちの中に見られる水路を見ると水路が町の境目にもなっていることがわかります。



水路が町の境目に!